

日本生薬学会海外派遣助成事業  
海外で開催される国際研究集会への参加〔成果報告書〕 (抜粋)

(B-2)

1. 派遣者

所属 京都大学大学院薬学研究科 薬品資源学分野 職名 大学院生 (D3) 氏名 桑田 幸恵

2. 研究集会名

(欧文名) Plant Biology 2010

(訳文名) 植物科学合同集会

3. 派遣期間 2010年 7月 31日～ 2010年 8月 6日 (7日間)

4. 国際研究集会の概要とその成果 (併せて600字～800字で記載下さい。)

(概要)

Plant Biology は、アメリカ植物生物学会が毎年開催している学会であるが、今年度は四年に一度のカナダ植物生理学会との共同開催の学会であり、アメリカ・カナダを始め世界各国から植物科学の研究者が集まった。招待講演を含めシンポジウムでの発表は 155 題、またポスター発表は 914 題を数え、植物の生理、遺伝、花粉学などに関する多様な研究発表がなされた。

(成果)

本学会は植物科学に関する主に基礎代謝や生理学を主体とした研究発表の場であり、直接薬に結びつくような研究は少なかったが、植物科学の基礎研究の緻密さに触れることができた。ある現象について興味・疑問がでてきたら、それを徹底的に調べる。その姿勢はすごいと思った。ミクロな視点の研究を、幅広い分野 (マクロな視点) で多数聴くことができたことはとても有意義だった。また、本学会に参加してとても驚いたのは、女性が多い、ということだ。おそらく参加者の半数は女性だっただろう。そのため、学会会場には託児所が設けられていた。これは今まで日本の学会では目にしたことのない光景であり、海外では出産、子育てをしながらものびのびと研究を続けられる環境が整っていることが感じられた。自分の研究課題は、植物のセスキテルペン生合成に関することであり、

“Characterization of  $\delta$ -guaiene synthases, new sesquiterpene cyclases from *Aquilaria crassna*” という演題でポスター発表を行った。発表内容の酵素の生成物はとてもユニークな骨格をもっており、討論時間中にはこの骨格に興味をもつ研究者の質問を受け、有益な意見も頂戴した。今回初めて海外の学会に参加し、自分の研究に関連する新しい情報を得られたことはもちろん、海外の同世代研究者の雰囲気や研究環境の一端を知ることができ、とてもよい経験となった。

5. キーワード (本研究成果のキーワードを最大6つお書きください。)

①植物科学に関する幅広い知識の吸収 ②女性研究者の活躍 ③英語での討論

6. 本会からの助成に対する意見・希望等

この度助成金により援助を頂き、金銭面での負担が軽減し安心して学会に参加することができ、感謝している。今後もこのような助成金制度を続けていただきたいと思う。

<希望>

申し込み締め切りと採択までの期間がもう少し短いと有難い。